

《報告》

江戸文学に登場する発光生物

後藤好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

日本の代表的な発光生物であるホタルは、奈良時代より詩歌や物語、随筆など多くの文学に取り上げられてきたが、その他の発光生物の登場例はほとんどない。これは発光生物の多くの種が海に生息していること、日本の陸域に分布している発光生物の種類が少ないこと、ホタル以外の陸上で見られる発光生物はあまり目立たず、治安の良くなかった時代ではこれらを見る機会が少なかったことなどが要因と考えられる。

筆者はホタルが出てくる江戸文学を調査する過程で、少ないながらも発光生物が描かれている作品を確認することができたので紹介したい。

引用については、ホタルの漢字表記は「螢」に統一したが、その他の漢字の旧字体は通用字体に改めた。踊り字はそのままとしたが(く)は/ \ と表記した。

1. 発光バクテリア

発光バクテリアは海水中に普通に生息していて、生イカや魚などの体表で急速に繁殖すると暗所で光るのが観察できる。古くから食品が発光することは観察されていたが、その原因が発光バクテリアであることは19世紀になって明らかにされた。また魚類には、発光バクテリアを体内の特別な器官に棲息させ、その光を自身のコミュニケーションに利用しているマツカサウオ *Monocentris japonica* やヒカリキンメダイ *Anomalops katoptron* の例も知られている(羽根田, 1972, 1985)。

発光バクテリアの記述が見られるのは仮名草子の『醍醐随筆』(寛文10年(1670)刊)である。仮名草子は、近世初頭に仮名または仮名交じり文で書かれた物語・散文作品の総称で、内容は物語・説話・教訓書・随筆・笑話・地誌・遊里評判記など多岐にわたり、実用性・教訓性・娯楽性などを特色としていて、『醍醐随筆』は随筆形式の仮名草子にあたる。著者の中山三柳(忠義, 号華陽子, 1614-1684)は医師で、仮名草子の他に『蹄疾集』『病家要覧』などの医学書も著している。下巻に“ひかるもの”を取り上げた一段があり、なかには疑わしい記述が見られたり、魂魄についても記されているが、発光バクテリアや発光菌糸の記述が見られる。

一(前略)鯛といふ魚も。ひかる、鯛ごとにはひからず。魚による成べし。或人鯛を切て。鉢に入をきたれば。夜に到てすさまじくつよくひかる。これを煮てくいけれ共、害をなさざりけりと語れば。さればよ、鮪といふ魚も。夜に入ひかるあり。惣別、海潮、夜はひかるもの也。(後略)

「或人鯛を切て。鉢に入をきたれば。夜に到てすさまじくつよくひかる」という記述から、この現象は発光バクテリアの繁殖によるものと考えて間違いはないだろう。「これを煮てくいけれ共、害をなさざりけり」も、発光バクテリアで有害な種は見つかっておらず、むしろ腐敗菌が繁殖しだすと発光バクテリアは見られなくなるので、発光している状態のものを食べても安全である(羽根田, 1972)とされ、正確な記述といえる。

2. 発光キノコ

2-1. ツキヨタケ

現在日本で確認されている発光キノコは10種を越えている（大場，2013）が，その多くは八丈島や小笠原諸島，南西諸島などの島々に分布している．もっとも広く分布しているのはツキヨタケ *Omphalonus japonicus*（ハラタケ目ホウライタケ科）で，北海道から九州まで，秋にブナやイタヤカエデ等の広葉樹の枯れ木などで発生する．

とめ山や懐みとこにかくす月夜茸 宗白

とめ（留）山は許可なく入山を禁じられた山のこと，勝手にキノコ狩りに入ったものの，ツキヨタケが光るので見つからないように懐みとこに隠して下山してきた，という句である．ツキヨタケが光るのは裏面のひだの部分で，発光している写真では長時間露光による撮影のため，かなり強い光のように見えるが，実際は微弱な光である．したがって，この句は滑稽味を狙った想像によるものであろう．

下陰したかげや木葉このはくもらで月夜茸 玖也

下陰は枝や葉で光が遮られて暗くなった草木の下のことで，木の葉曇るは光が木の葉で遮られて暗くなることを意味する動詞．下陰を見ると月夜茸が光っているので木葉曇るならぬ木葉曇らぬだ，という句．

両句とも談林俳諧の撰集『続境海草』（顯成編，寛文10年（1670）自跋）秋部「茸狩」に載る句で，宗白・松山玖也（1623-76）はともに大阪の俳人．

他にも俳諧の連句と奇談でツキヨタケと考えられる発光キノコについて確認することができた．

発句 むすぶ手の骨にしみ込む清水哉 百堂 『つくし琴』（百童作，安永5年（1776）序）

（5句略）

7句 月見むと椎や榎を伐りすかし

8句 物すさまじく夜光る茸

（後略）

発句 みどり子や礎きぬたすゆれば這上る 金馬 『道之記』（金馬編，寛政3年（1791）成）

（11句略）

13句 どこやらに秋の気色の松の色

14句 月夜に光る茸とひけり

（後略）

上記作品はいずれも独吟連句であるが，稿本が残されたのみで板行はされなかった．「夜光る茸」「月夜に光る茸」と表現されているキノコは，百堂・金馬ともに秋田の俳人であることからツキヨタケと考えて間違いないだろう．

なお「月夜茸」の名称は，江戸後期の本草学者，坂本浩然の『菌譜』（天保6年（1835）刊）が最初とされているが，宗白・玖也の発句や金馬の付句を見ると，それ以前からツキヨタケという呼び名があり，それを浩然が採

用したという可能性もある。

江戸時代中頃に堀麦水が著した『三州奇談』続編巻六「七尾網燐」には、「闇夜茸」の名でツキヨタケの記述がある。

又闇夜茸と云ふ物あり。闇中に二三莖を下げてあるけば、三四尺四方は明るくして昼の如し、多く積む所には、遠望火光に似てけり。是を煮て喰ふに、吐瀉して多く煩らふ。味も又劣れり。必ず食すべからずとかや。

ツキヨタケは毒キノコとしても知られ、ヒラタケやムキタケ、シイタケなどの食用キノコと形態や発生場所が似ているため、現在でも最も中毒例が多い。主な中毒症状は嘔吐と下痢で、『三州奇談』の記述と合致する。ただし「三四尺四方は明るくして昼の如し」は大げさで、これに限らず江戸時代の記述にはこうした誇張された表現が多く見られる。ツキヨタケの危険性は早くから知られていたらしく、『今昔物語集』にツキヨタケの中毒と思われる話が4編見つかるという（大場, 2013）が、そのうちの1編「金峰山の別当、毒茸を食ひて酔わざること」（巻二十八・第十八話）は金峰山寺（奈良県吉野）の老僧がツキヨタケをヒラタケと偽り別当を毒殺しようとして失敗する話である。

なお、著者の麦水（1718-1783）は金沢の人で、俳人としても知られ蕉風復興運動では初期蕉風への復帰を提唱した。

2-2. 発光菌糸

朽ち木や落ち葉に白く広がった発光キノコの菌糸を夜間や暗室で見ると、発光しているのが確認できる。子実体・菌糸ともに光る種の他に、日本でも普通の食用キノコであるナラタケのように菌糸の発光が肉眼で確認できる種もあり、ナラタケの菌糸の発光は都市部でも見ることができる。発光菌糸を取り上げた作品は仮名草子や読本、俳諧・雑俳で確認できた。

されハ、おろかなるまなこにて。見るハ目ちかひあり。あるひハほたるを火と見、あるいハ、きつねのとほすあた火を、まことの火と見なし。くち木のひかりを、火と見、あやまる事のミあり。...

曾我休自作『為愚痴物語』（寛文2年（1662）刊）の巻の四第二十「性空聖人の事」の一節である。『為愚痴物語』は随筆形式の教訓物仮名草子のひとつで、作者の詳細については不明である。性空上人は平安時代中期の天台宗の僧で、播磨国（兵庫県）の書写山に円教寺を創建、しばしば靈験を現したと伝えられている。引用は智者と愚者のものの見方を述べたくだりで、愚者はホタルの光や狐火、朽ち木の光（発光菌糸）を本物の火と見誤るとし、ホタルと並んで朽ち木が発光することが記されている。ここでは「くち木のひかり」とのみの記述であるが、前出『醍醐随筆』の下記の記述は発光菌糸の特徴を捉えていて、正確な観察に基づいているようである。

一（前略）又くちたる木。くちたる竹。深林中に久しくありて。白くかびしめりたるは。白き所、暗夜あんやに至てひかる。かはきたるはひからず。（後略）

発光菌糸の記述は曲亭馬琴（1767-1848）の読本でもみられる。馬琴には戦国時代の大内・陶・毛利氏の争いに取材した「大内もの」と呼ばれる作品群があるが、読本『近世説美少年録』もそのひとつである。悪の美少年末朱すゑあけのすけ之介晴賢（＝陶晴賢）の前半生を描くが1832（天保3）年に第3輯を刊行したところで中断する。

1845 (弘化2) 年、『新局玉石童子訓』と改題し再開、末朱之介と善の美少年大江杜四郎成勝 (大江音就=毛利元就の弟) との対立と成勝の武者修行が描かれたところで未完に終わった。成勝と従者峯張柴六郎通能は上野国 (群馬県) 甘楽郡の部領荘へ赴くが、その手前の田文という地で村人に虐げられていた旅の父娘を助けたことで韓錦樞二郎・奈良桜八重作兄弟の恨みをかう。成勝・通能は樞二郎・八重作の妹押絵の忠告に従い部領を避け新部領へ向うものの、途中にある川を渡れず思案をしていると、通能は川辺の草むらの中に光っているものを見つける。

…「那見給はずや草葉隠に、光るは螢児に似たれども、今は四月の中浣なるに、彼虫の出べくもあらず。何に敷あらん」と訝れば、成勝も遽しく、頭を回し熟相て、「いはるゝ如く彼光りは、宛螢児に似たれども、時猶早きのみならず、動かざれば猜するに、彼草叢の裏にこそ、朽たる株のあるならめ。夏の夜雨の霽たるをり、路傍なる朽木はさら也、海蝦蟹の甲なども、よく光りを発つことあり。又怪むに足る者かは。」…

「四月中ばだからホテルではないだろうに、一体なんだろうか」という通能の疑問に、成勝は「朽た株があるのだろう。夏の雨が晴れた夜には朽木は言うまでもなく、海のエビやカニもよく光りを放つ事がある」と答えている。成勝の海のエビ・カニも光るという部分は、発光菌糸ではなく発光バクテリアによる発光のことであろう。

…、俟たる通能が、丁と打出す投石の浜に、一箇の小力士片頬を撲れて、「咄嗟」と一声叫びも果ず、身を翻して叢の、彼光りある頭へぞ、地响打して仆れける。卻舎に下なる彼朽木は、砕けて潑と散乱しつゝ、頭顱の上に降懸る、光りに驚く追隊の衆人、「呀」とばかりに慌惑ひて、走退まくする程に、通能透さず打出す、投石に亦復両三名、撲れて撞と転輾べば、いよ／＼蜚散る朽木の光りに、孰か疑ひ恐れざるべき。「幻術ならん。」と思ひしかば、ます／＼怯えて立脚もなく、起つ滾びつ逃走れば、…

角力の弟子を連れた八重作が追いかけてくると、待ち受けていた通能は飛礫を投げる。飛礫を受けた弟子が倒れこむ拍子に光っていた朽木が飛び散って舞い、それを見た弟子たちは幻術だと怖れて逃げ去る。

砕けて飛び散った朽木が空中で光って見えるのはやや誇張された表現のように思えるが、ある程度大きな朽木全体に発光菌糸が広がっていれば、通能のように容易に気付くだけの光を発することを、筆者はかつて観察している。

橋すずみ朽木の光るうわさ哉

自徳

甲斐の俳人五味可都里 (1743-1817) が、諸国の俳人とやりとりしていた文の中から発句を抜き書きしていた『諸国文通発句集』に見られる句である。下五が「うわさ哉」と結んでいるので、自身の観察ではなく聞いた話をもとにした句であろうか。

江戸時代末期の雑俳『しげり柳』(緑亭川柳編、嘉永元年(1848)刊)に見える次の句も、発光菌糸の可能性が高いと考えられる。

二代目の車胤夜学に腐ツ木

車胤は中国東晋の人で、幼少期は家が貧しくて油を買うことができず、夏はホテルを集めてその光で勉強をしたという故事は「螢雪の功」として良く知られている。句意は、車胤は夜はホテルの光で勉強した

というが、二代目の車胤はホタルではなく腐った木で勉強している、である。腐った木が夜学のための光を発しているというのであれば、朽ち木全体に回った発光菌糸と解釈すべきであろう。ただし、実際に発光菌糸で本を読むのはホタルの光以上に難しいはずである。

ちなみに、朽木(発光菌糸)の発光は江戸時代より前に知られていた可能性が高いことが、室町時代中期の歌僧正徹の和歌からも読み取れる。

蛍とぶ山のしげみにすだきあひてちらぬ光や朽木なるらん 『草根集』(文明5年(1473)一条兼良序)

正徹(1381～1459)は備中国(岡山県)小田郡小田莊神戸山城主小松康清または秀清の子で、初名正清、字清巖、臨濟宗東福寺の書記を務めた。歌意は、「ホタルが飛んでいる山の繁みで、集まって飛び散ることのない光は朽木なのだろう」で、朽木と詠んでいるので発光菌糸による発光であろう。歌題「螢」ではあるが、朽木の発光が詠まれた珍しい和歌である。この歌を他者が理解できたことを考えれば、当時の人々は朽木の発光を知っていたと考えられる。

3. ホタルミミズ?

日本で最も普通の発光ミミズは、体長40 mm、太さ1.0～1.5 mm、黄白色で半透明のホタルミミズ *Microscolex phosphoreus* である。ホタルミミズは体外発光型の発光生物で、体外に分泌された発光液が空気中の酸素に触れて発光をする。ミミズの発光については狂歌に1首と、明治に入ってから雑俳の冠句(笠付)に2句が見つかった。後者は明治時代の作品ではあるが、明治の川柳改革以前の江戸文学の延長の作品としてここに取り上げる。なお、冠句の△は冠題である。

名木雑虫

螢かと探れば土に影引のまつによる / \ 光る蚯蚓も

庵道 『狂歌新三栗集』(天地根撰、文政元年(1818)刊)

△めつた無性 草ぐち掴む蚯蚓の火

泉柳 『冠付懸想文』(賞鶯判、明治13年(1880)刊)

△紛らしい 宇治で掴だ蚯蚓の火

『[冠句] 京の花』(百歳編、明治36年(1930)刊)

庵道の狂歌の「蚯蚓」がホタルミミズであるかの判断は難しいが、雑俳2句の「蚯蚓」はかなり疑問である。発光液を分泌するホタルミミズに「蚯蚓の火」という表現はそぐわないし、土壌中に生活するミミズに対して「草ぐち掴む」もあわない。ホタルの幼虫をミミズボタルと呼ぶ地方もあるので、幼虫が陸生のマドボタル属 *Pyrocoelia* の幼虫あるいは同じく陸生のオパボタル *Lucidina biplagiata* の幼虫を詠んだ句と考えたほうがよいかも知れない。

マドボタル属の幼虫は扁平で細長く、夜間、草や笹、灌木などの上を発光しながら這うのを普通に見ることができるので、目につきやすいマドボタル属の幼虫の可能性の方が高い。

参考にホタルの幼虫を詠んだと思われる句をもうひとつあげておきたい。

女恥けり螢をもえる毛虫かと

藤句 『虚栗』(其角編、天和3年(1683)刊)

毛虫と表現しているからには成虫のことではあるまい。また、「もえる」と詠んでいるので、発光してい

るはずである。掲句では陸生ホタル類の幼虫とそぐわないところもあるが、毛虫のように細長くて光るとなれば、やはりホタルの幼虫ととらえるのが自然である。

おわりに

江戸時代、ホタルを詠んだ狂歌や俳諧・雑俳は数多く知られているが、僅かながらも他の発光生物を詠んだ作品も確認できた。また、散文では仮名草子・読本・奇談に発光バクテリアと発光菌類の興味深い記述が見られた。しかし、他の分野ではこれまでホタル以外の発光生物の記述を確認することはできていない。もし発光生物が出てくる江戸文学をご存じであれば、ご教示いただけると幸いである。

出典一覧

〈和歌〉

「新編国歌大観」編集委員会編（1990）新編国歌大観第8巻 私家集編IV。角川書店。

〈俳諧・雑俳〉

飯田正一・榎坂浩尚・乾裕幸校注（1971）談林俳諧集一 古典俳文学大系3。集英社。

池原練昌編（2004）可都里と蟹守 五味家蔵五味可都里・蟹守資料集。五味企画。

藤原弘編（1982）秋田俳書大系近世中期編。秋田俳文学の会。

鈴木勝忠編（1998）雑俳集成3期6 幕末川柳風狂句集。私家版。

鈴木勝忠編（1998）雑俳集成3期10 上方明治冠付集。私家版。

〈狂歌〉

西島孜哉編（1987）狂歌後三粟集（他）近世上方狂歌叢書8。近世上方狂歌研究会。

〈読本〉

内田保廣・藤沢毅校訂（2001）新局玉石童子訓 [下] 叢書江戸文庫48。国書刊行会。

〈仮名草子〉

朝倉治彦編（1981）仮名草子集成第2巻。東京堂出版。

深沢秋男他編（2011）仮名草子集成第47巻。東京堂出版。

〈奇談〉

日置謙校訂（1933）三州奇談。石川県図書館協会。

引用文献

羽根田弥太（1972）発光生物の話ーよみもの動物記ー。北隆館。

羽根田弥太（1985）発光生物。恒星社厚生閣。

西野嘉憲写真、大場裕一解説（2013）光るキノコと夜の森。岩波書店。